

災禍の経験を伝承する「語り部」の思いからみる 活動開始・継続に関する考察： 災害・戦争・事故の当事者・非当事者に対する 質問紙調査の自由記述から

A Study of Initiation and Continuation of Activities from
the Perspective of Disaster Storytellers:
Analysis of Free-form Responses to Questionnaire Survey of Victims and Non-victims
in Natural disasters, Wars, and Accidents

佐藤 翔輔¹
Shosuke SATO¹

¹ 東北大学 災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

The author and NHK Fukushima Broadcasting Station conducted a questionnaire survey of so-called disaster storytellers, who pass on their experiences of events that have occurred during natural disasters, wars, and accidents. The survey elicited specific responses in the form of free-form descriptions, such as the continuity of storyteller activities, obstacles to activities, motivation for activities, and creative ways of conveying information. In this paper, the author examines the findings from the survey to provide insights into how to generate new storytellers for the next generation and how to make these activities sustainable.

Keywords : disaster tradition, disaster storyteller, capacity development, suitable activity, nisoku-no-waraji

1. はじめに

被災した各地においては、被災や災害対応に関する体験を語り部（災害語り部、震災語り部）が語りによって伝える学習が盛んに行われている^{1)・2)・3)}。東日本大震災のように、その主なハザードが津波であった場合には、沿岸部は津波によって、多くの構造部が流失、損壊し、その後のガレキ撤去により、多くの場所が更地となる。展示施設などの建物の伝承拠点よりも、口承によって震災の体験・状況を伝える活動が先んじて活発化した背景には、このような要因が存在していることが考えられる。

口頭による継承を行う行為は、効果的な災害伝承の手段の一つであると考えられている⁴⁾。人間の思考形式や認知作用には、論理・実証モード (Paradigmatic Mode) とストーリーモード (Narrative Mode) の2種類があるという^{5)・6)}。論理・実証モードは、「ある物事が正しいのか、間違っているのか」を問い、厳密な分析を通して、物事の真偽を明らかにしようとする思考の形式である。ストーリーモードは、「ある出来事と出来事とのあいだに、どのような意味のつながりがあるのか」を注視する思考の形式である。人間による記憶が理解を促進する上で、物語 (ストーリー) が有効であることが明らかにされている^{7)・8)}。前述した、語り部と呼ばれる体験者による「語り」は、ストーリーモードの伝達手段であり、情報の受け手にとって理解しやすいものであると位置づけられる。また、筆頭著者らは、震災を体験した当事者による生の語りのほかに、体験した本人とは異なる人物、本人の語りの映像、その音声、その文字を再生媒体とする比較実験を行ったところ、実験参加者の8ヶ月後の記

憶量について、語り部本人からの生語りを聞いた実験参加者の再生量と正確性は、他の媒体に比べて著しく高いことを明らかにしている⁹⁾。

筆者とNHK福島放送局は、災害・戦争・事故を含む災禍における出来事の経験を伝承する、いわゆる語り部に対する全国的な質問紙調査を実施した。同調査では、語り部の活動の継続性や障害となっていること、活動のモチベーション、伝え方の工夫など、具体的な回答を自由記述の形式で得ている。本稿では、同調査で得られた結果から、次世代の語り部を新たに生むための知見と活動を持続可能なものにする知見を考察する。

2. 調査概要

NHK福島放送局と著者が知り得る語り部活動を行っている団体・個人に、郵送またはウェブで発送し、249名から回答を得た。性別は男性が47.0%、女性が52.6%、年代は10代が1.2%、20代が8.0%、30代が2.8%、40代が8.8%、50代が13.7%、60代が22.9%、70代が23.7%、80代が14.5%、90代が3.6%、都道府県は北海道が2.0%、岩手県が4.8%、宮城県が7.2%、福島県が9.6%、埼玉県が1.2%、千葉県が0.8%、東京都が10.4%、茨城県が0.4%、神奈川県が1.6%、新潟県が3.6%、静岡県が0.4%、愛知県が0.4%、奈良県が0.4%、大阪府が0.8%、兵庫県が5.6%、岡山県が6.8%、広島県が12.0%、山口県が0.4%、愛媛県が1.6%、福岡県が0.8%、長崎県が14.1%、鹿児島県が1.6%、沖縄県が8.0%、災禍は原子爆弾 (広島) が13.7%、東京大空襲 (東京) が13.7%、原子爆弾 (長崎) が13.3%、東日本大震災 (福島) が

9.6%, 沖縄戦(沖縄)が8.4%, 2011年東日本大震災(宮城)が7.2%, ハンセン病・2018年西日本豪雨(岡山)が7.2%, 2011年東日本大震災(岩手)が5.2%, 水俣病・2018年西日本豪雨(熊本)が4.8%, 1995年阪神・淡路大震災(兵庫)が4.0%, 2004年新潟県中越地震(新潟)が3.6%, 1990年雲仙普賢岳噴火(長崎), 1993年北海道南西沖地震(北海道)が2.0%, 知覧特攻隊(鹿児島)が1.6%, 1995年阪神・淡路大震災(大阪)が1.6%, 2018年西日本豪雨(愛媛)が1.6%であった。回答者の語り部活動歴は、平均8.6年±SD 7.3)であった(図1)。

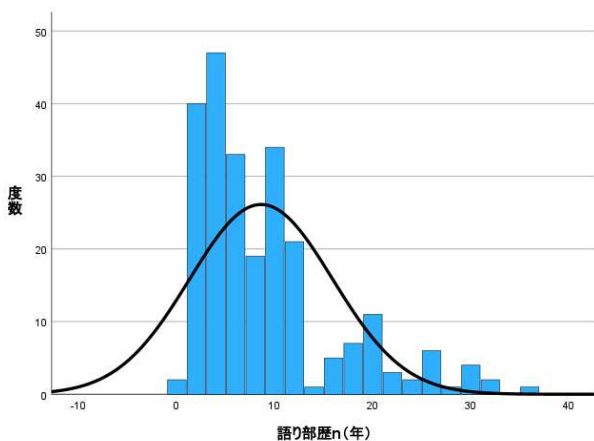


図1 回答した災禍の語り部の活動年数の分布

3. 結果・考察

(1) 語り部活動をつづけていくうえでの大変さ

「語り部活動をつづけていく上で、大変さを感じたことがありますか?」という設問に対して、「はい」が78.7%, 「いいえ」が18.9%だった。大変さを感じる人が多数である一方で、2割弱が大変さを感じていないということにも着目すべきである。これについて、災禍別でクロス集計を行うと、いずれの災禍でも「はい」が多い一方で、「いいえ」は東京大空襲(東京)で43.8%, ハンセン病・2018年西日本豪雨(岡山)で33.3%と他よりも多く、他の災禍とやや異なる傾向を示した。

つぎに「はい」と回答した人に「その大変さとはどのようなことですか?」という設問に対して(複数回答), ①時間の確保が41.8%, ②資金の確保が18.4%, ③人生ステージの変化(就職, 出産, 高齢化など)が16.3%, ④周囲の無関心が10.2%, ⑤その他が63.8%となった。⑤その他においては自由記述を得ているので、これ対して先行研究¹⁰⁾で採用している内容分析を行った(表1)。125名の「その他」の回答者の自由記述を意味のある最小単位に分割すると256件の記述があった。表1には、紙面の制約上、5件以上該当したラベルのみを掲載している(256件中85.2%に該当)。ラベルに対して「区分」という、やや上位概念を付している。分析の結果、「その他」のなかには、選択肢として、用意されていた①時間の確保, ②資金の確保, ③人生のステージの変化, ④周囲の無関心に該当すると思われるものが含まれていた(表1)。

改めて、以上の①~⑤以外で、その他中で最も多かったのは「語る内容の組み立て」で、「1. 語り部活動で話す内容を工夫したり、まとめることが大変なこと」「2. 聴き手の年齢や居住区域等に応じて、話す内容を工夫す

ること」「5. 語り部を続けるために、情報収集や必要な学びを続ける必要があること」「9. 語りをする上で、内容や構成、タイムマネジメント等を考えること」であわせて76件・38.8%と、これがももとの選択肢にあった場合は、最も多かった①時間の確保の次点になった可能性がある。

表1 語り部活動をつづけていくうえで大変なこと(「その他」で記述された内容の分析結果)

No.	内容	件数	比率	区分
1	語り部活動で話す内容を工夫したり、まとめることが大変なこと	30	15.3%	語る内容の組み立て
2	聴き手の年齢や居住区域等に応じて、話す内容を工夫すること	22	11.2%	語る内容の組み立て
3	直接経験した当事者ではないため、伝えるのに苦労していること	19	9.7%	非当事者
4	自身を含む語り部が高齢になり、このまま活動を継続できるか分からないこと	17	8.7%	③人生のステージの変化
5	語り部を続けるために、情報収集や必要な学びを続ける必要があること	16	8.2%	語る内容の組み立て
6	語り部活動と、仕事や他の活動等とを両立していくこと	15	7.7%	①時間の確保
7	大変さはかんじていない(責任感・やりがいがある)	11	5.6%	該当なし(ポジティブ)
8	コロナの感染対策や自粛などにより、語り部活動ができないこと	8	4.1%	活動の場の不足
9	語りをする上で、内容や構成、タイムマネジメント等を考えること	8	4.1%	語る内容の組み立て
10	聴き手の関心が低いなど、思っていたような反応が返ってこないこと	7	3.6%	④周囲の無関心
11	家族の体験を伝えたいが、直接経験した当事者ではないため苦労していること	7	3.6%	非当事者
12	当時は思い出し辛いこと	7	3.6%	精神的な負担
13	話したことが、どの程度聴き手に伝わっているか分からないこと	7	3.6%	語る質
14	関心を持ってもらうこと	6	3.1%	④周囲の無関心
15	当事者の思いを引き継ぐこと	6	3.1%	非当事者
16	語り部の次の担い手確保や育成が難しいこと	6	3.1%	次の担い手の確保
17	語り部活動に関して、同僚や家族等周囲からの理解が得られないこと	6	3.1%	④周囲の無関心
18	語り部活動をどう次の世代に引き継いでいくかということ	5	2.6%	次の担い手の確保
19	自身の健康問題によって、活動ができるか心配なこと	5	2.6%	③人生のステージの変化
20	活動する上で、見返りが少ないなど負担が大きいこと	5	2.6%	②資金の確保
21	行政や他の組織等の他の関係機関との連携がうまくいかないこと	5	2.6%	④周囲の無関心

その他で次に多かったのは「非当事者」である。「3. 直接経験した当事者ではないため、伝えるのに苦労していること」「11. 家族の体験を伝えたいが、直接経験した当事者ではないため苦労していること」「15. 当事者の思いを引き継ぐこと」が該当する。当事者でない人の活動が進んでいることの表れでもある。ほか、「大変さはかんじていない(責任感・やりがいがある)」、「次世代の担い手」として「16. 語り部の次の担い手確保や育成が難しいこと」「18. 語り部活動をどう次の世代に引き継いでいくかということ」が件数としては多かった。(2)なぜ語り部活動をしているのか

「なぜ語り部活動をされていますか?」という設問にて、自由記述で回答を得た。これについて、前述の内容分析¹⁰⁾を行った。意味のある最小単位に分割すると369件の記述があった。1人1.5件ほど回答していることから、複数の理由によって活動を行っていることも分かる。表2には、紙面の制約上、5件以上該当したラベルのみを掲載している(369件中97.3%に該当)。

表2 なぜ語り部活動をしているのか(自由記述の内容分析)

No.	内容	件数	比率	区分
1	語り部で語ったことを自分や周りの人の命を守るために役に立ててほしいから	52	20.9%	命を守るため
2	家族の体験を語り継ぎたいから	31	12.4%	経験や歴史を語り継ぎたいため
3	風化しないように次世代に伝えていきたいから	28	11.2%	経験を語り継ぎたいため
4	自分の体験を伝えたいから	25	10.0%	経験を語り継ぎたいため
5	希望のなかで被災地を支援したいから	21	8.4%	被災地への支援や被災者支援を伝えたいため
6	語り部でことが大切だと思えるから	20	8.0%	経験を語り継ぎたいため
7	体験者の高齢化が進み、直接経験する人が少なくなっているため、語り継ぐことが大切だと考えていること	19	7.6%	経験を語り継ぎたいため
8	語り部でことごとく感動や感動を味わっているから	18	7.2%	命を守るため
9	語り部の経験があるから	16	6.4%	経験を語り継ぎたいため
10	被災地の問題を考えたいから	14	5.6%	経験や歴史について考えたいため
11	地域で起きた出来事や出来事など、過去の経験や歴史を伝えていきたいから	14	5.6%	経験を語り継ぎたいため
12	同じ困難を乗り越えたいから	13	5.2%	命を守るため
13	関わっていた仕事やボランティア活動等によって始めた	12	4.8%	経験を語り継ぎたいため
14	語り部活動を通じて、自分自身が得られるものがあるから	10	4.0%	自分のため
15	地域を愛する気持ちが、活動の原動力であるから	10	4.0%	経験を語り継ぎたいため
16	命の大切さを伝えたいから	10	4.0%	命を守るため
17	経験者の年代が引き継ぎ難いから	9	3.6%	経験を語り継ぎたいため
18	語り部活動に関心のある人が増えたり、交流がある等して続ける原動力になったから	8	3.2%	自分のため
19	地域を創出した人に支えへの感謝を伝えたいから	6	2.4%	経験を語り継ぎたいため
20	若い人の経験を伝えたいから	6	2.4%	経験を語り継ぎたいため
21	語り部がボランティアに変わった。意義があったから	6	2.4%	経験を語り継ぎたいため
22	語り部に生かすその人を尊敬すると思ったから	6	2.4%	自分のため
23	内閣府の基盤整備について考えてほしいから	5	2.0%	経験や歴史について考えたいため

表2の区分欄に着目すると、最も多かったのは「経験を語り継ぎたいため」で「2. 家族の体験を語り継ぎたいから」、「3. 風化しないように次世代に伝えていきたいから」、「4. 自分の体験を伝えたいから」、「6. 語り継ぐことが大切だと思うから」、「7. 体験者の高齢化が進み、直接語れる人が少なくなっているため、語り継ぐことが大切だと考えていること」、「8. 地域で起きた

戦争や災害など、過去の経験や歴史等を伝えていきたいから」、「9. 経験者の声や思いを引き継ぎたいから」、「20. 親しい人の経験を伝えたいから」とあわせて61.0%を占める。次に多かったのは「命を守るため」で、「1. 語り部で聞いたことを自分や周りの人の命を守るために役立ててほしいから」、「16. 命の大切さを伝えたいから」であわせて24.9%、「平和・戦争について考えてほしいため」で、「5. 平和について考えてほしいから」、「10. 核兵器の問題を考えてほしいから」、「23. 沖縄の基地問題について考えてほしいから」であわせて16.1%であった。

ここまでは、「他者のため」であることが主眼であるのに対して、これより下位はだいぶ異なるニュアンスなものが該当する。「9. 語り部の依頼があるから」、「13. 携わっていた仕事やボランティア活動等によって始めた」、「21. 語り部ボランティアに誘われたり、募集等があったから」であわせて13.7%が「依頼・ニーズがあるため」と、外発的なものが挙げられている。また、「14. 語り部活動を通じて、自分自身が得られるものがあるから」、「18. 語り部を聞いた人から感想をもらったり、交流がある等して続ける原動力になったから」であわせて9.6%と、「自分のため」と上位の理由とは真逆の回答も多くあった。「14. 語り部活動を通じて、自分自身が得られるものがあるから」のなかには「楽しいから（雲仙普賢岳噴火（長崎）、20代）」「語り部活動にやりがいを感じているから（原子爆弾（広島）、70代）」という回答があった。また、「8. 語り継ぐことに使命と責務を感じているから」と「使命・責務だと思うため」は7.2%あった。

(3) 語り部活動の専業・兼業と継続に関する意見

「仕事（語り部以外）をしながら語り部活動をしていますか？」という設問に対して、「はい」が54.2%で、「いいえ」が34.5%であった。なお、無回答は11.2%あり、回答者の一部にとって判断の難しい設問だったことが想像される。「いいえ」のなかには、自身にとっての主要な職業として、ボランティアとして、または語り部活動を専業等で実施しているということになる。他方、「はい」、つまり、語り部活動を兼業で行っている回答者が約半数を占めた。

この「はい」と回答した人に対して、「仕事をしながら活動を継続する上で大変なこと、それでもつづけていく理由、つづけるために工夫していることなど、詳しく教えてください」という設問にて、自由記述で回答を得た。これについて、前述の内容分析¹⁰⁾を行った。意味のある最小単位に分割すると123件の記述があった。内容分析の結果は、得られた回答が多様であり、表1や表2のようにある程度のラベルに集約することは困難であった。以下に主要なもの挙げて述べる：

1) 本業の時間をけずって調整しなければならないこと、時間が限られること：「講話のために休みを取ること（原子爆弾（長崎）、20代）」、「休みの日を活動に充てているため活動できる日が限られてくる（東日本大震災（宮城）、20代）」、「語り部をする時間の確保と学ぶ時間の創出が難しい（東日本大震災（宮城）、50代）」、「小学校への派遣講話は平日が多いため、仕事の都合をつけて有休を取得する必要がある（原子爆弾（広島）、40代）」、「仕事をしている中で語り部や講演依頼等があると、そうするためには仕事を休んでいかなければならず、いったん決定した語り部活動の日程は、こちらの都合で変更は出来ない。この日が空けられるように、仕事の段取りを組まないといけないといったこと（1993年北海道南西沖地震（北海道）、60代）」、大学生なのでできる講義であれば大学の先生に相談したりしています（沖縄戦（沖縄）、20代）」、「講話の時間は平日が多いため有給休暇で対応しています（原子爆弾（長崎）、30代）」などがネガティブな回答である。一方で、次のような回答も得られた。「仕事に支障がないように、活動可能日時を事前に伝えてあるため困ることはない。子ども達に関わる仕事をしているため、それぞれに相乗効果があり有意義な活動ができています（東京大空襲（東京）、50代）」、「私の体験を把握している上司の理解もあって両立できている。基本は会社休日での対応とし、平日にかかる場合は、業務都合を優先しつつ、年次休暇を活用しながら、件数を絞って対応している。将来ある子どもたちの受入（修学旅行など）は平日が多く、生きた教訓を届けたいので、可能な限り業務調整して臨んでいる（東日本大震災（福島）、30代）」、「伝承館で希望日からシフトを組んでいただいているのでつづけられます（東日本大震災（福島）、60代）」

2) 本業がメインで、活動はかたわらで楽しくやっていると、「健康のため、少しばかりの農業をやりながら、ガイド（平和）をさせてもらっています（沖縄戦（沖縄）、80代）」、「機織り（琉球絣や花織り）を元々の仕事として来たので、それとの調整を取りながら、時間配分をしている。身体的、精神的にプラスをとる上では、仕事と活動、両方あることでプラスになっている（沖縄戦（沖縄）、70代）」、「仕事をしながらは、平日の研修会などには参加できないが、どうにか工夫し少しずつ研修にも参加し無理をせず継続していくことが大切だと思う（原子爆弾（長崎）、50代）」、「大変というより、優先順位を自分の中で押さえておけば問題はないと思います（原子爆弾（広島）、60代）」、「仕事は毎日ではないパートなので、忙しくないときに活動をしている（原子爆弾（長崎）、50代）」、「休み等、自由がきく方なので自由が利く特にならず（東京大空襲（東京）、40代）」、「無理をせず、空いた時間を利用する、会話を楽しむこと、未知の人に出会えることを楽しむようにしています（東日本大震災（福島）、70代）」、「私の場合は土日祝日がいっしょに休める仕事をしているので、語り部活動は休日を中心にしています（東京大空襲（東京）、50代）」、「スケジュール調整できるときだけ、語り部をやっている（東日本大震災（岩手）、40代）」、「必要とされた時は断らず受けている。生業が中心のスタイルは崩していない（東日本大震災（宮城）、60代）」

3) 職場や家庭など周囲の理解を得ること：「活動に理解と応援がある職場をやっと見つけたので、この悩みはようやく解決しました（雲仙普賢岳噴火（長崎）、20代）」、「仕事との両立ができているのは、職場と家庭の理解の賜物です。私自身は自分のやりたいことを仲間と共にやっているだけです。苦労は感じていません。忙しいことはありませんが、つらくはないです。そのための時間のやりくりでのモットーは、その時の優先順位をきめておくこと（原子爆弾（長崎）、60代）」、「職場の上司、同僚に

休日や余暇を利用しての被爆伝承講話の傍聴を促して伝承活動への理解協力を得ている（原子爆弾（広島），60代）」、「私には、活動に対する職場の理解がありました。あまり大変だとは感じていません（原子爆弾（広島），60代）」、「社内はもちろん、取引先の担当者にも語り活動をしている事を公言していました（東京大空襲（東京），50代）」、「勤務先には、ボランティアとして被爆体験伝承講話を行うことを社外業務として認めてもらっている。ときに休みもお願いしてかなえてもらっている（原子爆弾（広島），50代）」、「なかなか語り部との兼職を理解してもらえる職場が少ないように思います（東日本大震災（福島），50代）」、「私は障がいを持ちながら活動しています。勤め先にも事前に話をし、理解を得ています（原子爆弾（長崎），50代）」、「年数経過してくると仕事関係の周りの理解が難しくなって来ているように思われます（東日本大震災（宮城），60代）」

- 4) 語り部活動だけでは生活できない：「語り部だけで生活は不可能。特に冬場は全く仕事がない。日本の場合（地方）観光ガイドとしての職業の身分はとても低い。この職業が成り立つ様な施策が必要なのではないかと思う。私の場合、続けているのは使命感、責任感、大好きな仕事だから。（東日本大震災（岩手），70代）」、「生活のためにはお金が必要なので、どうしても仕事が優先になります。時間がなくなります。それでもこの土地で暮らしていく限りは、忘れてはいけない事だと思うので、多くの人に知ってもらふ必要があると思います（原子爆弾（長崎），50代）」、「語り部としての活動だけでは生活が苦しいため、働きながら取り組んでいる。原動力は、沖縄がまた戦場になるリスクが高まっているからである。沖縄戦や基地問題を伝え、沖縄を平和な島に戻したい（沖縄戦（沖縄），20代）」、「フリーランスの仕事をしながら、活動しております。時には、どちらを優先すべきかと悩むこともありますが、収入無くしては活動も出来ません。お仕事優先することを恥じないで頂きたいと思います（原子爆弾（広島），70代）」、「生活が語り部だけでは成り立たない。続けていく理由は、後世のため。自分の役割のため（原子爆弾（長崎），40代）」

4. おわりに

本稿では、災害・戦争・事故を含む災禍における出来事の経験を伝承する、いわゆる語り部に対する全国的な質問紙調査のデータ、特に自由記述の内容分析を行った。その結果は、次のようにまとめられる：

- 1) 語り部活動をつづけていくうえでの大変さは、時間や資金の確保、人生のステージの変化や周囲の無関心といったもののほか、話す内容を工夫やまとめ、聞き手の属性を踏まえた内容の調整や事前情報の収集など、語る内容の組み立てに尽力していることが分かった。筆者は、これに関連する取り組みとして、時短型で語り部学習を行うプログラムの開発を共同・支援している¹¹⁾・¹²⁾。
- 2) 語り部活動のモチベーションには、語り継ぐことの重要性を感じたり、命や平和の重要性をうったえるものが多かったほか、依頼やニーズとった外発的な

もの、スキルアップを含めた自分にとって得られるものがあるなどが含まれる。これに関連して、広く小学生から大学生を担い手として参画してもらうボランティア解説員制度をみやぎ東日本大震災津波伝承館で実施している¹³⁾。

- 3) 回答者の半数は、仕事の傍ら語り部活動を行っている。勤務時間以外の時間を活動時間に当てたり、語り部活動だけでは生計が成り立たないというネガティブな意見がある一方で、職場での理解を得ることや、有給をとって対応したり、優先順位を踏まえることで問題なく兼業で語り部活動を実施している人（二足のわらじ）の存在も明らかになった。

謝辞

本稿に掲載されたアンケート調査は、NHK 福島放送局によるもので、著者が一部を協力したものである。同社・佐野風真氏、武田健太氏、土井鮎太氏に感謝申し上げる。同アンケートに協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げる。本研究は、科学研究費・基盤研究（C）「実災害における効果に着目した被災地を越える災害伝承の追跡的調査」（研究代表者：佐藤翔輔）の助成を受けて実施された。

参考文献

- 1) 佐藤翔輔：東日本大震災の被災地における震災語り部・被災地ガイドの年代・性別・空間分布，地域安全学会東日本大震災特別論文集，No.9，pp.73-76，2020。
- 2) 浅利満理子，中川政治，佐藤翔輔：宮城県における震災学習プログラムに関する現状分析—東日本大震災と津波災害から6年間の震災伝承の特徴—，地域安全学会論文集，No.31，pp.77-85，2017。
- 3) 3.11 メモリアルネットワーク：2021 年度東日本大震災伝承調査報告書，pp.6-27，2022。
- 4) 佐藤翔輔：災害対応の知識共有に関する理論的考察：「語り」に着目して，地域安全学会梗概集，No.42，pp.165-168，2018。
- 5) ドナルド・ノーマン：人を賢くする道具—ソフト・テクノロジーの心理学（佐伯胖，八木大彦，嶋田敦夫，岡本明，藤田克彦訳），新曜社，416pp.，1996。
- 6) 中原淳，長岡健：ダイアログ 対話する組織，ダイヤモンド社，224pp.，2009。
- 7) Thorndyke, P. W.: Cognitive structure in comprehension of narrative, *Cognitive Psychology* Vol.9, 1977.
- 8) Shank, R. C. and Abelson, R. P.: Script, plans, goals and understanding: An inquire into human knowledge structure, *Eurbaum*, 1977.
- 9) 佐藤翔輔，邑本俊亮，新国佳祐，今村文彦：震災体験の「語り」が生理・心理・記憶に及ぼす影響：語り部本人・弟子・映像・音声・テキストの違いに着目した実験的研究，地域安全学会論文集，No.35，pp.115-124，2019。
- 10) 佐藤翔輔：中学生が行う被災体験の聞き取り学習に関する分析：階上中学校における東日本大震災を対象にした災害伝承の学習事例，地域安全学会論文集，No.37，pp.79-87，2020。
- 11) 佐藤翔輔，大須武則，黒澤健一：語り部学習を活用した時短型・災害疑似体験学習プログラム「ツナミリアル」の開発と試行，地域安全学会梗概集，No.50，pp.225-228，2022。
- 12) 若木望，佐藤翔輔，渡邊勇，邑本俊亮，今村文彦：時短型災害語り部学習プログラム「ツナミリアル」の効果検証に関する実験的研究，地域安全学会論文集，No.43，pp.95-104，2023。
- 13) 佐藤翔輔，今村文彦：災害伝承施設の機能強化に関するアクションリサーチ：みやぎ東日本大震災津波伝承館を対象にして，地域安全学会梗概集，No.54，pp.147-148，2024。